
死？

柊 煌時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死？

【Nコード】
N3136W

【作者名】
柊 煌時

【あらすじ】
僕は、
一度“死んだ”と思う。

(前書き)

僕がこのHNにしたのは、

ちょっとしたことがあったのでした。
駄作ですが、どうぞ。

「貴方には、難病の疑いがあります。精密検査を行いましょう。」

ある冬の日、僕はそう宣告された。
率直に言えば、怖かった。

意識などしていなかった死が、すぐそこにあることに。

話は少しだけ前に遡る。

ある冬の日、陸上部の練習で走っていた僕は、急に体の芯から凍えてしまったかのような気がした。

「ああ、またか……。」

小さく嘆息。

右手、それもその中指を見ると、真っ白になっていた。
血など通っていないかのように。

寒い時には、誰にでも両手が白くなってしまふことがあるだろう。
それが、より酷い状態で、それも右手の中指だけに出るのだ。

「なあ、大丈夫なのかよ、ソレ。」

僕の指を見た陸上部の部員も言う。

「……わからない。一旦、病院にでも行った方がいいかもな。」

親は僕の話聞き、最初は軽く受け流していたのだが、どうしても
と言って、検査をすることになった。

「まあ、心配してお金の無駄遣いになるだなんだろうけどね。」

母親はそんなことを言ったが、僕は今回だけは本当に危ないかもな、
と思っていた。

検査はそれ程面倒なものではない。

基本的には所見がどの様になるかを調べると、血液検査だったか
ら。

そして1週間後、冒頭の言葉を聞くことになったのであった。

「僕は・・・死んでしまうのですか？」

突拍子もなく、そんな言葉が出る。

死ぬ、という概念。

考えすぎなのかもしれない。

それでも、その時、僕は怖かった。

「精密検査をしてみないことには分かりませんが・・・。」

精密検査の日。

緊張すると結果が正常時と変わってしまうそうなので、落ち着きうとするのだが、全く落ち着かない。

怖い。

何も分かりはしないが、それでも怖かった。

そして精密検査の結果は・・・最悪ではないものの、あまり芳しくないものだった。

難病の一種、膠原病の

・・・

疑いが非常に強い。

直ぐに死ぬ、という訳ではないそうだが、完全な病気の説明はされていない。

しかも、これが他の病気に発展してしまったら、打つ手はほぼ無いそうだし、

僕の症状だと、

末端の血管の痙攣　心臓、大動脈の痙攣　急死

の可能性もあるそうだ。

体質改善として、漢方薬を使ったりしているが、どうなるかなど全く分からないそうだ。

自分は、

何の為に生きているの？

進学校に行っていた僕は、生きている価値を見いだせない。

勉強の為なの？

進学の為なの？

何の為なの？

勉強も手が前と比べてつかず、
模試の偏差値も下がる。

定期試験も上位争いから一歩も二歩も遅れる。

陸上のタイムもからつきだった。

何ヶ月か経ち、

そこまで駄目になって、何かを思った。

自分に夢はあったじゃないか。

幸か不幸か、同じ病気の人はそこそこ多い。

その人に希望を与えたい。

傲慢だ。

そういう理由で努力することは、最低だ。

努力することは、自分の為であって、人の為ではないべきなのに。

でも、その醜悪な考えによって、

僕は何とか前に進み始めた。

それでもしないと自分を保っていられなかったのであろう。

今は、昔のように成績も良い訳ではない。
順番は戻っては来ているけれども。
陸上も、記録はまだ伸び悩んでいる。

でも、僕は、前に進もうと思えた。

病気(?)のお陰で、僕は一度“死んだ”。

今進んでいる一歩がどこに向かうかは、分からない。
でも、一歩でも、前に進んでいこう。

(後書き)

自分のこと書いてどうする。

ってな感じですが、マジです。

僕はいつ死ぬのかわからない。

だから、

強く、縁の下の力持ちのようになりたくて。

残されている時間を、その間だけでもしっかり生きたくなくて。

このHNにしました。

賛否両論はあると思いますが、

出来れば、死ぬことについてお聞かせ頂ければと思っております。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136w/>

死？

2011年10月9日15時48分発行